

HPCがもたらす先々 構造家・西蘭博美

朝倉幸子◎TH-1
illustration:Taco

1963年生まれの構造家の西蘭博美さんは、都城工業高等専門学校から豊橋技術科学大学に編入して工学研究科修士課程を終了した。父親が棟梁だったから建築には自然に興味を覚えていった。豊橋技術科学大学は、高等専門学校卒業生を対象とする新構想の大学院進学を前提にしている国立大学である。全国で2校しかない専門性の高い学校だから、学生は優秀で研究者になる人も多い。

西蘭さんは加藤士郎教授から、構造家の佐々木睦朗さん(本コラム63回目に登場)を通じて、以前佐々木さんが所属していた木村俊彦構造設計事務所を紹介され入所した。入所早々から、K2ビルディング(設計:篠原一男)、梅田スカイビル(設計:原広司・アトリエファイ建築研究所)、横浜アイランドタワー(設計:楨総合計画事務所)、新潟市民芸術文化会館(設計:長谷川逸子・建築計画工房)など、誰もが知る建築家が設計した大規模な構造を担当したのだ。木村事務所では、1996年に取締役、その2年後に同僚の構造家の久田基治さん(今コラム66回目に登場)とともに代表取締役になり、木村俊彦構造設計事務所の閉鎖の任を果たすことになったのでした。そのころの事情に詳しい覇志堂の話は見事だ。西蘭さんには「Space Structure 木村俊彦の設計理念」(共著、鹿島出版会)がある。

その後、久田さんをつくった構造設計工房デルタを経て、2002年に西蘭博美構造設計事務所として独立し、法政大学で非常勤講師として構造設計の教鞭を取り始めて今も続けている。西蘭さんは研究者として論文発表にも力をいれる一方、市販のソフトウェア製作にも携わっているなど、幅広い範囲で構造を掴むことのできる方ようです。

■ HPCとは

技術的な面だけでなく研究者としての才能がある西

蘭さんには特許を取得したHPCがある。令和元年度九州地方発明表彰・中小企業庁長官賞を受けている「超薄肉コンクリート板」の発明である。沖縄の建物のベランダなどで使われる穴あきブロックに代わる地震にも強い素材をつくろうと、炭素繊維ケーブルを使って長尺PCパネルを考案したのだ。木村事務所時代に同僚だった阿波根昌樹さんと開発や販売も手掛けている。阿波根さんは、西蘭事務所の沖縄分室室長でもあり、HPC沖縄の代表として営業を担っている。

これまでのPCの分厚いルーバーのイメージから薄くて軽い板は、建築家からの需要が増えそうな素材。すでに西蘭さんが設計協力者としてかかわった沖縄にある技建本社ビル(設計:細久仁建築設計事務所)で、高さ9mの縦ルーバーで強い日差しを遮断しそれを意匠的にも生かした建物をつくった。地元の渡久山設計と協働で、琉球銀行牧港支店にHPCを使って美しい建築を完成させてもいる。すでに2015年から沖縄県を中心に10以上のプロジェクトで採用された。HPCは、日経アーキテクチャにも新世代の素材として取り上げられた(2018年6月28日号)。

建築家が使うときには、構造設計事務所に設計用のデータを貸出すのでオーダーメイドが可能だ。厚さが50mm以下のプレストレストコンクリートパネルの未来は広がる。複数の特許を取得済みで、ビジネスモデルは出来上がっているようだ。

構造家でありながら、人とのつながりを生かして発明家としても才を開花させる西蘭博美さん。軽井沢の別荘の庭に苔を育み戯れる時間が癒しになるといふ。そのメリハリを付けた生き方は、マネージャーとしての才覚も人並み外れていると見えるのです。

